

---

# 国 際 健 康 開 発 *I H D*

---

特定非営利活動法人(NPO)会報 13号 2014年8月

## 佐賀の賢人と東京大学医学部

牛島廣治

ushijima-hiroshi@jcom.home.ne.jp

今は誰も住んでいない実家の整理があったために、2014年5月の連休を利用して故郷の佐賀に戻った。その機会を利用し、半日の行程で伊東玄朴の旧宅と佐野常民の記念館を訪れた。本号ではその二人を紹介したい。伊東玄朴(いとう げんぼく)は江戸時代の末期に、佐野常民は江戸末期から明治時代に医学・保健学で活躍した。佐賀の7賢人の中に名前を連ねている。

伊東玄朴は1800年(1868年から明治が始まる)に佐賀県神埼市神埼町仁比山に生まれた。神埼市は吉野ヶ里でも知られている。幼少期から学問に勤しみ、その後、漢方医学を学んだ。17歳で佐賀に行き蘭学を学んだ。22歳で長崎に行きシーボルトの鳴滝塾で蘭学を深めた。佐賀藩に仕え、参勤交代にも加わり江戸と佐賀を往復した。32歳の時、象先堂(しょうせんどう)という蘭学・医学の塾を開講し、医療正始という元々ドイツ語の本でオランダ語に翻訳されていたものをさらに23年かけて日本語に翻訳した。42歳の時、牛痘種法編を翻訳した。その後、実際に牛痘の種が長崎に入り、全国に広がることになった。お玉ヶ池種痘所が江戸神田に設立され、江戸の種痘がそこで行われた。後で述べる相良らによって、

お玉ヶ池種痘所は本郷の加賀前田藩の場所に移動し、東京大学医学部の方に引き継がれる。60歳(1861年)で蘭医では初めての法印(将軍などを診察する医師)となった。70歳(1871年、明治4年)で死した。日本の西洋医学の基礎を築き、また多くの人材の育成を行った。旧宅のホームページは[http://kanzaki.sagan.jp/kankou\\_spot/itoh\\_genboku.html](http://kanzaki.sagan.jp/kankou_spot/itoh_genboku.html)である。

伊東玄朴の旧宅は佐賀平野の神埼から北に仁比山に向かったところの坂道の傍にあり閑静な場所であった。昔ながらのこじんまりした家であった。その近くには、第二次世界大戦中、その後の佐賀の豪族であった伊丹弥太郎の避暑の邸宅がある。緑が美しい、庭と家が調和した建物であった。

伊東玄朴とならんで佐賀の7賢人の一人で保健医療の面で江戸から明治期(1968年から始まる)に於いて活躍した佐野常民(さの つねたみ)を紹介したい。佐野常民は1822年(1823年ともある)すなわち文政5年、佐賀市川副町早津江に生まれた。幼少のころから秀才の誉れ高く、藩校である弘道館で学び、その後大阪で緒方洪庵、江戸で伊東玄朴らに蘭学や医学を学んだ。その後佐賀に帰ってから佐賀藩の精錬方の長となった。この当時、島原・長崎は島原の乱、シーボルト事件等で見られるように強い指導力を有する藩主がなく、佐賀藩は長崎までも気を配ることが要求されていた。佐賀

鍋島藩主のリーダーシップにもよるが、当時の情勢から西洋に負けないような軍事力を持つことが要求された。日本各地からリクルートがなされた。精錬に於いても優れた鉄砲、大砲を作るため化学等の知識をもつ常民が必要とされた。幕末には佐賀藩の海軍創設にも力を注いだ。そのために、有明海の早津江に三重津海軍所を作り、国産初の蒸気船「凌風丸」を完成させた。奇異に思われるかもしれないが、有明海は潟ではあるが干満が激しいため、自然のドック・造船所を作ることができた。蒸気船の鉄も、精錬所を持っていたので上手く進んだ。現在、三重津海軍所跡を世界遺産にとの活動がある。すなわち明治日本の産業革命遺産九州・山口との関連領域の1つの遺産として注目されている。一方、常民は1967年にパリ万国博覧会に参加し、その際に国際赤十字社の組織と活動を見聞した。尚、パリ万国博覧会には佐賀の有田焼など、佐賀県の特産物も展示された。

このように江戸時代活躍した常民であるから、明治になってからも政府の要職として働いた。1877年（明治10年）の西南戦争に際し、敵味方区別なく負傷者を援護する博愛社を設立した。1887年には博愛社は日本赤十字社となり、常民は初代社長に就任した。

私が30年位前と思うがその記念館（場所は現在の所と異なると思う）を訪れたときは、うっそうとした木々に覆われていた中の木造の建物であったが、今では早津江川に面したところに鉄筋コンクリートのきれいな建物として我々を迎えてくれる。参考として佐野常民記念館のホームページは、[http://www.saganet.ne.jp/tunetami/con\\_0](http://www.saganet.ne.jp/tunetami/con_0)

1/con\_01\_02.htmlである。日本赤十字社の名前は誰でも知っているが佐野常民と佐賀についてはご存知ない方もおられるかもしれない。

佐賀出身であり医学医療関係で活躍した方々についてその後についてはあまり知らない。ただ私が東京大学医学部出身者の名簿でみると医学部長として活躍された方が記載されている。明治期の相良知安

<http://sagarachian.jp/main/90.html> は東京大学医学部設立に貢献した。ドイツ医学を導入したことで知られている。佐賀県と東京大学大学院医学系研究科は、日本の近代医学の基礎を築いた佐賀藩出身の伊東玄朴及び相良知安の歴史的な偉業を顕彰するための協定を平成24年4月締結した。この事業として佐賀県「伊東玄朴・相良知安顕彰奨励賞」が発足した。この案内は

<https://www.pref.saga.lg.jp/web/var/rev0/0098/3674/haikei.pdf>にある。奨励賞への進展には、非常に時代は離れているが、近年の医学系研究科・医学部の科長・部長は桐野高明氏、宮園浩平氏が佐賀の出身で、その貢献によるものである。

（尚、今回の訪問の小冊子のPDFを別に添付します。）

Travelling forms a young man

Dinh Nguyen Tran

Department of Developmental Medical Sciences, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

The last three months was a very busy but unforgettable time for me. Right after

the New Year holidays, good news came with worry. Two of my abstracts were accepted by the two international conferences. Then, it was the time for preparing.

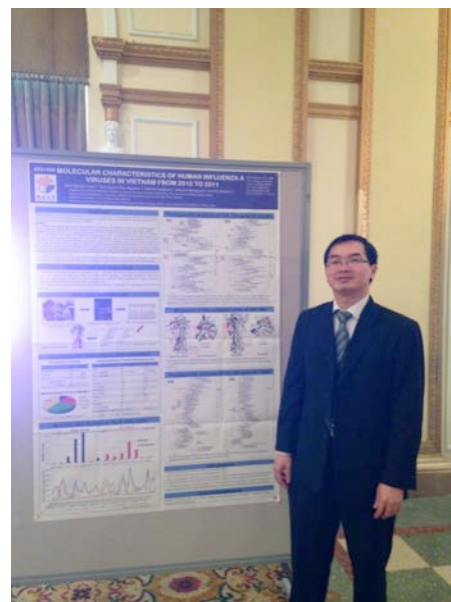
The first conference I attended was “St. Jude/PIDS Pediatric Infectious Diseases Research Conference” on February 21-22 at Memphis, Tennessee, USA. The conference was co-organized by both St. Jude Children’s Research Hospital and Pediatric Infectious Diseases Society. The program of the conference focused on “Frontiers in Infectious Diseases”. Many lectures were given by leading investigators in infectious diseases and microbiology. They shared their valuable experience, motivation and passion in doing research to the young audience with their humorous and friendly nature. Most of the attendees were young physicians, scientists, and others who have trained or are training in pediatric infectious diseases. Moreover, the conference also organized a series of career development workshops, including sessions of career paths in industry, government and academia. A wide-range of researches focusing on both the clinical and basic science of infectious diseases was presented by attendees. And probably the most important thing to me was I had an opportunity to present our research to colleagues in pediatric infectious diseases and received their comments to improve

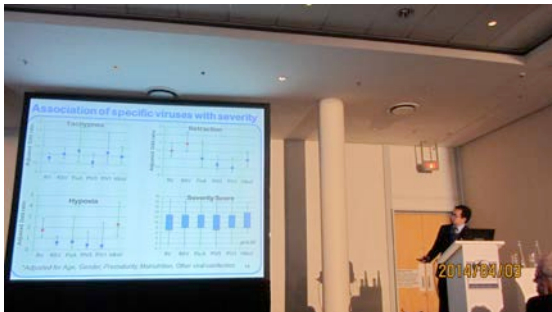
our research. In addition, I had a chance to visit St. Jude Children’s Research Hospital. As shown in its name, it is a pediatric treatment and research facility focused on children’s catastrophic diseases. Impressively, this is a nonprofit hospital, where everything is free of charge for children and their families from treatment, travel, housing and food. There was also time to enjoy the sights and sounds of Memphis. Memphis is an old and so quiet city, except the music. Memphis is the home of blues and birthplace of rock ‘n’ roll. I really enjoyed my lunch with unique barbecue while listening the live music in the restaurant on Beale Street. Visiting the Rock ‘n’ Soul Museum, it was the first time I could see and touch the jukebox, which I just heard about through the English lessons I studied about 20 years ago. Walking along the Mississippi River, watching the old steam boat recalled my childhood memories through the adventures of Tom Sawyer and Huckleberry Finn, the novels of Mark Twain that I read and read several times when I was a child. Going along the wide and silent streets, passing many abandoned buildings, on the very old style trams, economic difficulties can be felt here. However, talking with the people, the friendliness, happiness and peacefulness are still in their souls. If continue accepting what they are having now, even not adequate, they will lead a simple but happy life, like their music.

The second conference I attended was the 16<sup>th</sup> International Congress of Infectious Diseases, held in Cape Town, South Africa from the 2<sup>nd</sup> to the 5<sup>th</sup> April 2014. The meeting covered all of the fields in infectious diseases with special focus on major causes of death in Africa and elsewhere such as HIV/AIDS, malaria, tuberculosis, pneumonia and enteric infections. In addition, the conference also paid particular attention on nosocomial infections in developing countries and antibiotic resistant bacterial infections as well as emerging infectious diseases. Attending such a big professional conference like this was an award. Many things needed to learn, and it was really difficult for me to allot the time for attending all the interesting topics, and perhaps no time for sightseeing. Anyway, it was a good opportunity to learn very updated knowledge, to know what researches other investigators around the world were doing now, to know who we were, and where we were in the field. Moreover, I had a chance to meet and talk with many experts in infectious diseases. It is unbelievable that our abstract won the award for Communicable Disease Epidemiology from more than 1,000 abstracts. This international conference attracted thousands of valuable studies around the world, being selected for the award was actually a great honor. It was wonderful that I got the prize. But from

the deepest of my heart, it was the award for our group, from my professors to colleagues, from organizations that supported financially to the patients participated in this study. The Award also acknowledged our effort in dedicating for the health of children, especially for the developing countries. Beside the conference, I was really enjoyed the magnificent natural beauty of Cape Town, one of the most popular international tourist destination. I had chance to go up the Table Mountain, to view the city centre, the ocean with beautiful beaches through the cloud. I also visit Cape Point, the most south-westerly tip of Africa, where the Atlantic and Indian Ocean's meet.

For me, this sakura (cherry blossoms) season lasted too fast so that I could not realize how it was. However, I believed that this was the ever beautiful sakura season since I was here.





## 2014 年 6 月 タイ 訪問記

江下優樹

大分大学医学部

yeshita@oita-u.ac.jp

今年も、6 月に 2 週間の予定で、感染症の調査を行うために、タイを訪問した。政治的暴動がタイで起きていても不思議ではない状況であったが、滞在期間中、何事もなく

ホッとした。実は、このような状況は過去にもあった。しかし、本当に危険ならば、タイの仲間から連絡があるはずだと思って、安心して訪問を決めていた。お互いの信頼関係を得るまでには長い年数がかかったが、タイ事情については 2011 年 3 月発行の同会報 5 号に書いているので参照されたい。

タイ国バンコクのスワンナプーム国際空港 (Bangkok Suvarnabhumi Airport) に午後の定刻に到着した。福岡国際空港を出発した時点では、タイ航空機内は満席であったので、いつものように入国審査のところで長い行列が出来ると思っていた。しかし、ヒトはまばらで拍子抜けするほど、閑散とした広場のようなであった。福岡からの多くの日本人乗客は、バンコク経由で他の県に移動したのであろうか。入国審査は直ぐに終わり、目の前の両替カウンターで日本円をタイバーツに両替後、荷物受取の回転台のところに行くと、既に荷物が出始めていた。いつもなら、入国審査で 20 分以上、そして荷物受取も遅いときは 20 分以上待たされるのだが、今回は荷物が出てくるのも早かった。やはり、乗客数が少ないために、荷物も少なかったのであろうか。空港で仕事をしている担当の人々にとっては、休日になったのかもしれない。

手荷物検査カウンターを通過して出口をでると、いつもの様に迎えの人々でごった返していた。迎えの人々の数も若干ではあるが少ない様にも思えた。15 メータほど進むと、研究者仲者の N さん御夫妻とお子さん二人がいつもの様に待っていてくれた。日曜日に空港に到着するように計画したのには理由があった。N さんが迎えに来てくれることも考慮してのことであった。N さ

んは、大分大学で研究をされてマヒドン大学の大学院に学位申請をして Ph. D. を取られた。お二人の子供さんが生まれる前後に、大分大学での博士論文作成のための研究の機会が出来たことから、ご主人がタイで長女の世話をを行った。また、日本に到着してまもなく妊娠していることがわかり、日本滞在中は、産婦人科での定期検診に、私の家内が付き添い通訳係も兼ねた。妊婦が飛行機に搭乗できるぎりぎりまで、日本で研究が終了してタイに帰国後に Ph. D. を取得すると同時に、無事に出産して元気な長男が生まれた。名前は、日本語の「友だち」から一部をとって「とも」と名付けられた。話は少し横道に逸れたが、Nさんの車で空港を後にしたが、軍隊や特別な検問所があるわけではなく、少なくとも政治的な騒動が起こっているとは思われないくらいに、いつもの空港であった。

宿は、いつも大学キャンパス内にある寮に泊まることにしている。マヒドン大学熱帯医学部は大学院大学なので学部学生はいないが、世界中から集まってきた大学院生、研修生がいる。熱帯医学に関連した病院や施設があり、感染症関連の講座だけでも、医昆虫学講座、蠕虫学講座、原虫学講座、ベクターコントロールユニットなど、日本では一つの講座で構成されている分野が、いくつもの分野に細分されて講座になっている。そのため、熱帯医学部には、近隣諸国から、熱帯医学を学ぶ大学院生や、短期コースもあり各種の修了証書が発行されている。キャンパス内の寮は、その方達の宿泊施設でもある。人気のある寮なので満室のため予約が出来なかったことも何度かある。

野外調査に出かける際は、朝早くキャンパスを出発するので、寮での宿泊は私にとって便利である。寮の近くには、学内食堂が朝 6 時頃から開いていて朝食と昼食を食べることが出来る。日本の大学キャンパス内でもコンビニの店が建ち並ぶ時代となっているが、タイでは以前から学内のスタッフのことを考えて、いろんなお店がある。毎週一回、衣類や生活品を売る多くの小売店が敷地の一角に設置される。もちろん、惣菜なども売られており、夕食に買って帰る女性が多い。正確には把握していないが、日本の大学と異なり、マヒドン大学熱帯医学部に勤める女性の数は、日本の大学と比較して驚くほど多い。主婦も多いので、毎週開かれる定期的なマーケットは勤務する女性客で昼食時間はごった返しているほどだ。ちなみに、タイでは露天で食べ物やスーブ物を買うと、少し分厚いビニール（たぶん通常のビニールではない）袋に、スーブを入れて、日本の輪ゴムよりもっと太くて強い輪ゴムで縛る。私は、いまだに縛ることが出来ないが、タイの特に女性は輪ゴムの縛り方が皆おしなべて上手であり、ほどこときは意図も簡単にほどこしている。

今では普通のことだが、戦後の日本では、女性と靴下が強くなったと強調された時期があった。タイでは、もっと前から、女性、ビニール袋、輪ゴムは強かったのであろうと、タイを訪問するたびに思われる。野菜、果物などお店の前を少し借りて、リヤカーの荷台ほどの広さのお店を開いて売っているのは、ほとんどが女性である（写真 1）。





写真 1 月曜日の朝、大学キャンパスの壁一枚を隔ててモーニングマーケット開催

男性はほとんど見かけない。あるときに、研究室のスタッフに話したら、男性はもっぱら力仕事のほうに回るので、露天でのお店は奥さんに任せるとのことであった。今回の政治的騒動でも、生活がかかっている、広い車道にそった歩道にそって、いつもの様に、露天がいっぱいでいた。軍による夜間外出禁止令が私の滞在中も出ていたが、夜の 12 時以降の外出が禁止されていたが、露天の人たちは 10 時ごろになるとお店を一部たたむところが出てきた。なぜそんなに早く閉めるのだろうか、翌日に研究室のスタッフに尋ねたところ、バスにのって、2 時間以上をかけて自宅に戻る方が多とのことであった。12 時前には、自宅にたどり着く必要があったからである。夜間外出禁止令は少なからず影響していたのであろうか。都会にでて、物を現金化するために、かなり遠いところから来て、露天を営んでいるのは、やはりタイの女性はたくさんいたと思った。

この 15 年程の間に、マヒドン大学熱帯医学部もかなり様変わりした。古い建物を取り壊して、新しい建物を幾つも建てている。



写真 2 最先端の研究棟（右手前の建物）、新築の熱帯病病院（右奥の高い建物）、チャムロン・ハリナスタ研究棟（左奥の建物）

熱帯医学部の敷地内にある公衆衛生学部の建物は立派に様変わりした。と同時に、熱帯医学部のほうは、狭い敷地に幾つも建て替えが進み、その一つに最先端の研究を支援する研究棟が建てられた(写真 2)。講座単位ではなく、大学が支援するプロジェクトが展開されやすいように建物を建てて、熱帯医学部長の手腕が評価されるプロジェクトが動いている。また、新しい熱帯病の病院が建っていて、1 階には、日本とほぼ同じ価格の高級レストランがオープンしている。タイの食べ物事情を考えると頻繁に訪れるところではないが、若者も含めて、客の入りは上々である。このビルは、高度救命センターも兼ねており、救急車が 2 台停まっている。かつては広い道路に面した

建物に医昆虫学講座の研究室研実験室があったが、その建物は建て替えられて、1 階はテナントとして、銀行など入っていて、スタッフにも便利である。キャンパス内の銀行で、日本円をタイのバーツに両替した。パスポートの提示および日本円は一枚一枚全てコピーを取られて、若干の時間がかかったが、空港に到着したときよりも交換レートが良かった。銀行がキャンパス内にあるので、交換レートの良い日に両替ができることは都合が良いのではとも思った。

医昆虫学講座に属するベクター・コントロール・ユニット（媒介昆虫対策研究室）には女性が多く働いている。既に退職されている Y 先生が現役のころにトレーニングを受けた方々が、一人前となって研究をサポートしている。皆、蚊の飼育のエキスパートである。医昆虫学講座の全スタッフ数は 26 名であり、日本の講座に比べると贅沢な程の数であるが、一人退職しても補充が出来ない時代となっている。今回は、私の共同研究者の一人が講座の長となったので、お祝い会を研究室で行った。スタッフの 1 人の女性はタイのヒトが認める程の料理人である。いつものように料理を作ってもらい、楽しい一時であった。打ち解けると、皆朗らかに大きな声で話をするのは、どこの国の女性も同じ様である。男性はおとなしいがタイの男性も同様である。

今回のタイ調査でもデング熱の患者さん宅を尋ねて、蚊の採集をした。デング熱は蚊が媒介する。今回は、新しい媒介蚊の種類が流行地の患者宅で発見されたことから、みな心をときめかせている。新しい研究の展開が今後期待される。私は来年 3 月で退職の時を迎える。積み残した荷物は多いが、

これも一つの区切りである。今のところまだ元気なので、私の持っている技術を必要としているマヒドン大学と、退職後も 1-2 年は関わりたいと思っている。このようなこともあり、今、大分大学には、マヒドン大学から大学院生 1 人を引き受けている。3 ヶ月間の短期滞在であるが、研究だけでなく大分の事など日本の文化を知ってもらうために、魚の競りを見に連れて行く予定である。また、10 月には、大分で研究を行って学位を取得した N さんが大分に来て、タイの研究室での特殊実験室の立ち上げの打合せを行う事になっている。

タイとの関わりがこのように長く続くとは私自身思っていなかった。続く機会を作って下さったのは、本 NPO 法人の理事長である牛島先生である。牛島先生が東京大学に在職中に日本学術振興会の拠点大学交流事業で東京大学とマヒドン大学との共同研究が行われる際に、江下を誘って下さったことがきっかけで、一時途絶えていた共同研究者との研究再開に結びついた。いつも同じ研究費での出張ではないが、公的資金を使って海外で共同研究が続けられる事に感謝したい。公的資金は回り回れば国民の税金である。海外調査で得た有益な情報を国民に還元する必要があることを考えれば、本 NPO 法人が発行する会報がホームページに掲載されていることの意義は大きい。

## あとがき

会報 13 号を皆様のお手元にお届け致します。寄稿して下さいました皆様にお礼を申し上げます。

台風のシーズンとなり、九州の大分では、



今現在台風 11 号が接近しつつあります。自然に発生した台風からの被害を未然に防ぐことはかなり難しいことなのですが、大きな被害が起こらないことを願いながら、あとがきを書いています。次号に原稿を執筆して下さる方が、既に複数名おられますので、楽しみにしております。

本 会 報 は 、 ウ ェ ブ 上  
(<http://square.umin.ac.jp/boshiken/>)  
で公開されています。

本活動に御賛同くださっている皆様方には、引き続き御支援の程よろしくお願い致します。(YE)